

**新連載執筆のねらい**

「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像  
井上昭夫

ひらかなを主としてかかれた「おふでさき」に、もつともおおくあらわれるのは「事」という漢単語である。全首でじつに776回。教祖の原文では、「事」は漢語の崩し字の「こと」としてあらわれている。おなじ重要な意味要素をもつやまとことばとしての「こと」に対応する崩し字の「もの」が、やまとことばの「もの」と倭語で表現されているのに、「こと」だけは漢語の「事」と表出されているのは問題で(が)あると思われる。この「こと」と「もの」、あるいは「ある」などについての言語論と哲学の問題を、言文一致体運動なども意識しながら、本連載では吉本隆明が晩年に出版した「中山みき『おふでさき』解説」(『思想のアンソロジー』2006年)において提起した天理教者への挑戦を誘うかのような課題への応答をこころみるために、関連する本居宣長、和辻哲郎、高橋和巳らの思想世界を暗中飛躍しながら解説援用し、「おふでさき」17号最後の5首において、教祖が暗示要望されている「このさき」の「思案」を、グローバルな視点から学際的に自由自在に展開してみたい。

disabled people, urban design for social welfare began in the 1970s and continues to develop to this day in relation to the social background of the times. Its goal is to create an urban setting based on the principles of normalization, aiming for the complete humanistic restoration of the rights of the disabled people, as a key principle of social welfare for the disabled. This principle does not change in any way today.

Also, rather than place the responsibility of the issues arising from the disabled back upon the individual, it calls for a “societal model” that seeks to address this challenge as a social issue. Society ought to respect the lifestyle of each individual and respect the individuality of each way of life. Issues related to disabled people should also be addressed through such perspective, and aid should be provided with such professionalism and subjectivity. A society that enables the self-fulfillment of disabled people is required. Urban design for disabled people is the concrete practice of these principles.

**Norihito Nakao — Han Resources in Tenri University Sankokan Museum Collection (9) Folk Block Prints [1]**

Printed materials used and consumed in their daily lives by the general populace in the Chinese mainland and Taiwan are referred to as “Chinese folk prints.” This museum houses roughly 500 prints of such nature.

Folk prints range in size from two square yards, at the largest, to a size of a stamp. For the longest time, these were mostly wood block prints, but from about fifty years ago, stone block prints became the mainstream. And in recent years, it is mostly prints from resin boards and offset printing. Folk prints are not simply for viewing pleasure, like the *ukiyo-e*, but have a wide range of use.

According to Chang Daoyi, a Chinese cultural researcher, the uses of folk prints can be divided into twelve categories of *monga* (gate drawings), *satsuko* (paper craft), *shinzo* (divine figures), *shiba* (horse drawings), *nenga* (New Year’s drawings), *soga* (window drawings), *toga* (lamp drawings), *banka* (scenic drawings), *sozu* (insert drawings) *inki* (drawings for seals), *yugei* (for play), and others. In recent years, the production of folk prints have declined precipitously, and its use has also changed somewhat. However, even now, we can frequently see its use in the daily life of the people.

## 第22回宗教研究会開催(2月25日)

標記研究会ではこの3年間のテーマとして、「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題」のもとに研究会を開催してきた。今回はその6回目で最終回となった。講師は、カール・ベッカー教授(京都大学 ころの未来研究センター)。題目は「死(限界)と生を視野に入れた教育」。

ベッカー氏は、まず「教育に欠けているものは？」として、未来志向や先見の明、次に思考を束ねる、自分に繋がる論理(この発想の結果はどうなるのか)、さらに人を束ねる、社会に繋がる論理(この行動の影響はどうなるのか)、そして、環境を束ねる、循環に繋がる論理(生老病死に対する準備と慈悲)の4つを指摘。未来志向や先見の明がないと、看護師でも一般社員でも、上司の指導や現場の苦勞に「耐える力」がなく、すぐに拗ねたり辞めたりダウンしてしまったりする。また、喪失(悲嘆)の受容ができないと、注意が散漫となり、職場事故や品質ミス、健康不調、病欠、生産の低下に繋がる。さらには、医療費のコストがかかり、時間のロスともなる。周囲に対する嫉妬や不信、疎外感などの情緒への影響としても現れてくる。では、こうしたことを予防するために何が求められるかということ、事前の教育であり、苦勞直後の「継続するつながり」であるとする。そしてそれをサポートするのは日本人の智慧だという。

事前の教育とは、未来を予測し、人生には四苦八苦と表される苦勞があるということ、また、人間は生老病死から逃れることのできない存在であることを認識しなければならないこと。思うようにならない時にこそ「人間」が証明されるのであり、そのためにはライフ・プラン(家計)教育も必要となってくる。一方、事後のサポートとは、大人は皆苦勞するが、身内やチームの協力で耐えて頑張れるということをいう。こうしたことから、教育は確率的将来に対する準備であるということが出来る。

一方、社会の激変によって教育に求められているものが拡大していると指摘。現代社会において、若者は年配の死を看取らなくなった、家族や地域が伝統を伝えなくなった、殺人・自殺・事故死等が激増した、自己決定権の増加によって現代社会は個人の自己責任を負わせるようになった、医療技術と能力の向上で選択肢が増加した、費用が無限に増え、末期医療と介護が財政を圧迫し破綻しかけていることなどに言及。

そこで、教育では、死生学教育(人権・自己決定・自己責任)、支援やカウンセリングの提供、コスト削減時代の社会福祉改善に対応することが急務である。年齢や世代別の死生観教育、死の社会学、生死に関わる公共政策、死生学と関わる経済学など、死生学が社会の様々な問題に対応していけるからこそ、その教育の実施が必要であることを具体的な社会事象を交えながら解説。「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題」に対して「死生学」教育がひとつの答えになると感じた。

(堀内記)